〔光る話〕の花束8　'Bright Tales' Anthology

わがひそかなる楽しみ

田辺聖子 編

わがひそかなる楽しみ

田辺聖子 編

光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—十二—十三
（郵便番号112—11）
光文社　出版局

わがひそかなる楽しみ『光る話』の花束8

一九九〇年一月三〇日　初版第一刷発行

編者　田辺聖子
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三
電話　東京(〇三)九四二—二二四一（代）
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　大日本印刷
製本所　大日本印刷

定価一、三〇〇円
（本体一、二六二円）

落丁本・乱丁本は本社でお取り替えいたします。　© Seiko Tanabe 1990

ISBN4-334-93208-8　Printed in Japan

わがひそかなる楽しみ ――目次

好敵手　木山捷平　7
富美子の足　谷崎潤一郎　32
ローズ・ルールダン　V・ラルボー　池田公麿訳　70
貧乏サヴァラン（抄）　森茉莉　89
嫌妻権について　田辺聖子　100
お風呂の楽しみ　アポリネール　須賀慣訳　133
人間椅子　江戸川乱歩　148
禁じられた音楽　A・パラッツェスキ　竹山博英訳　172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

美しいもの　愉しいもの（抄）　城　夏子　200
骨仏　久生十蘭　207
ひとり博打　色川武大　211
鳩の血　立松和平　228
バッソンピエール公綺譚　ホフマンスタール　池内紀訳　258
くさびら譚　加賀乙彦　271
オトナの持つ闇　田辺聖子　327
筆者紹介・収録作品出典一覧

わがひそかなる楽しみ ――

田辺聖子 編

装丁　スタジオギブ
装画　長尾みのる

好敵手

木山捷平

一

私はしばらく碁会所へ行かなかった。冬は寒いからである。二年ばかり前、交通事故で足の骨を折ったあとがまだ少し痛むので、炬燵に入って、もっぱら静養につとめた。もっとも痛むといっても、びっこをひくほどではないから、もしも私に恋人でもあれば、万難を排して毎晩でも外出できる筈だが、あいにく今はそんなものがひとりもなかった。

「あなた、すこし散歩でもなさったら。からだに毒ですよ」

と老妻が何度も注意した。

じじいと朝から晩まで顔をつき合わせていると、彼女も何となく人生の寂寥を感ずるらしかった。

「いやあ、家にいれば、自動車にひかれる心配はない。家は極楽だ」

と私は言い言いした。

「それではわたし、ちょっと郵便局まで行ってきます」
「郵便局に何をしに行くんだい」
「ちょっと葉書を買いに」
彼女はそそくさと郵便局へ出かけた。郵便局は三町ばかりだが、一時間もかかって葉書を数枚買ってきて、それから老眼鏡をかけて、その葉書をかいて、
「それでは、わたし、ちょっと葉書を出してきます。あなた、何かご用はありません？」
「用は何もないね」
と答えると、用がないのが不満らしく、年甲斐もなくちょっとふくれ面をして、葉書をいれに行くこともあった。
ざっとこんなあんばいで、彼女は外出の口実には事かかなかった。口実というものは、考えればいくらでも出てくるものらしく、老若を問わず、貴賤をわかたず、それが人間の本能のようであった。
「今日はわたし、お風呂に行ってきます」
と言い出したこともあった。
「風呂はうちにあるじゃないか。この間桶を修理したばかりだから、まだ壊れてはいないだろう」
「いいえ。からだの目方がいくらになっているか、はかって来てみたいんです」
と言い出した時には、私もちょっと呆れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

私は毎朝、新聞をよんだあと、新聞の掲載碁を碁盤に並べた。碁は五十をすぎて覚えたので、一向に上達しないが、石を握るのは嫌いではなかった。たいていの女性は子供の時、オハジキという遊戯をするが、あの心境に似ているのかも知れなかった。だからもちろん、八段や九段の大先生が、一手うつのに一時間も一時間半も長考して打ちおろした石の意味を理解することはできないが、並べてみると、その意味のわからないところが面白い。

ところが、毎日の碁譜には、十手か十五手かしか載っていないので、「なるほど、ふん」とひとりで感心したり、「この手はちょっとどうかな」勝手な批評してみたりしたあと、こんどは自分が八段先生や九段先生になったつもりで黒白両方の石を持って、打ちつづけてみると、日によって黒が勝つこともあれば、白が勝つこともある。白が勝っても黒が勝っても、自分ひとりでやったことだから腹は立たない。しかし私は腹の立たない練習をしているのではなかった。

「おい、ひとりでやるのは、どうもつまらん。腹が立たなくて困る」

と私が或る時老妻に愚痴を言うと、

「そんなにつまらないなら、しなければいいでしょう」

と老妻が言った。

「それはそうだが、せっかく新聞代は払っているんだから、並べて見ないと損をしたような気がして、一日中忘れものをしたようで、気が落着かないんだ」

「それは困りましたねえ。いっそのこと、碁盤を古道具屋に売ってしまえば、きっぱりするんじゃないかしら」

「冗談は言わないでくれ。碁はわしの現在の唯一の趣味なんだぜ。趣味がなくて、人間は生きて行けないよ。あッ、そうだ、それよりもお前、お前も碁を習ってみたらどうだ」

と私はうまいところに気がついた。

が、老妻は、

「いやです」

と一言のもとにはねつけた。

「なぜかね。若い娘でもないのに、そう一ぺんに、ヒジテツをくわせるもんじゃないよ。さ、ここに来て坐ってごらん。わしが丁寧懇切に教えてやるから」

と私は老妻をうながしたが、三尺向うにいる老妻は炬燵から出てこなかった。

「お前は、碁というものは、何かむずかしい高等数学のように考えているらしいが、実はそうではないんだ。子供のオハジキと同じなんだ。黒石と白石を交互に一つずつ並べさえすればいいんだ。さ、だからここへ来てごらん」

と私は下手(したで)にでてすすめたが、老妻は頑固として応じなかった。

ひとり碁が終ると、私は茶の間から自分の部屋にひきあげた。そして自分の炬燵にあたって、炬燵の上で本をよんだり、書き物をしたりするのが、私のショウバイである。

部屋には一鉢、蘇鉄の鉢がおいてあった。この蘇鉄は、数年前、ある大学生が鹿児島土産だといってくれたものだが、くれた時には罐詰の空罐に入るほど小さなものだった。せっかくの貰い物だから、私は庭の隅に植えておいたが、この熱帯系植物は寒さに弱く、冬はすっかり葉を枯ら

した。あくる年の春になっても芽は出ず、もう枯れ果てたのかと思っていると、夏になってにょきにょき葉を出した。が、その葉も間もなく冬が来て霜がおりる頃になると、またすっかり葉を枯らした。

あまり同じことばかり繰返すので、私は気の毒になって、去年の秋、植木鉢を買ってきて鉢に植えかえ、自分の部屋にはこびこんでやったのである。

すると正直なもので、外には霜柱がおりるようになっても、蘇鉄は葉は枯らさなかった。勝手なもので、私は枯れない葉に愛情をいだいた。かと言って、私の部屋は熱帯のように暑くはないので、葉はやっと息をしている程度の青さで、なろうことなら友達の大勢いる鹿児島に帰りたいような風情だった。

「まあ、そう言うな。これもお前の運命だ」

と私はひとりごとを言いながら、彼女を抱きかかえて、日あたりのいい場所に移動してやった。

幸いなことに、ことし東京には雨があんまり降らなかった。雨のふらない日は、ガラス窓をとおして日光が部屋にさし込むが、冬の日光はよく動くので、私は彼女を部屋の中で一番あたたかい場所においてやろうと思うと、その気骨はなみ大抵ではなかった。しかし鉢をかかえて、部屋を三尺五尺と、一日に何回となくあちこち動き廻るのは、私の肉体の運動にはなるらしかった。

老妻が口うるさく散歩をすすめても、イエスマンのようになりきれないのは、こんなところにも理由があった。

ところが立春すぎると、私は歯が痛みだした。私のこの冬の予定には、はいっていないことだ

った。はじめの二日、富山の置薬をのんでごまかそうとしたが、ごまかしきれないので、三日目になって、私は歯医者に出かけた。

歯医者の待合室には女ばかりが待っていた。東京にはどうしてこんなに女が多いんだろうと、私は痛い頬に手をあてて考えた。おそらく、男は都心にはたらきに出て、昼間はこの郊外地を不在にしているのだろうと解釈はついたが、女ばかりの中に男が一人だけまじっているのは、何となく気おくれなものだった。

やっと私の順番がきて、診療室の診療台の上にのっかると、

「先生、二日ばかり富山の置薬でごまかそうとしましたが、ごまかしきれないので、やってきました」

と私が言うと、

「どれ、どれ、ちょっと拝見、……はあ、これではごまかせないでしょう。……しかし歯にも寿命というものがありますからなあ。いずれは抜歯しなければ根本的な治療にはなりませんが、私も今日はごまかしておくことにしましょう」

と先生が言った。

「先生もごまかされるんですか」

私が不満顔で言うと、

「ええ、でもあと、二、三日で痛みはとまります」

「あと二、三日もかかるんですか」

「そりゃ、二、三日はかかります。しかし今夜はよく眠れると思います」
と先生が言った。
先生の言ったとおり、その晩は十分とは言えないまでも、割合によくねむれた。
そのあと、五日ばかり通院して、先生からヒマが出た。抜歯はまた日をあらためてやろうということになった。
歯科医院の玄関を出ると、私の足は町の方に向かった。何となく解放感で、私はわが家なんかに帰りたくない気持がわいてきたのだ。

二

映画館の前に立って、赤い血をふき出した女が、浪人者の男に飛びつきかかっている看板をながめて、私はその隣にある碁会所の階段をのぼった。
階段をのぼる時、パチ、パチ、碁をうっている碁石の音が、いり乱れて聞えた。今日も相当、碁客がきているような雰囲気だった。
「やあ、どうしてたんだ。ずいぶん長いこと、顔をみせなかったじゃないか」
と私の顔をみると、会所の主人である二段先生が言った。
「いやあ、碁はもうよそうかと思ってたんだ。いくらやっても、わしは強くならないからなあ」
と私は口から出まかせというほどではないが、心境の一端をかたった。
「そんなことはないよ。あんたもうちに来だしてから、完全に二目はあがったよ。ちょっと停滞

することは誰にでもあるものなんだ。停滞したあと、またぐっとあがるものなんだ」
と二段先生が、入歯をガクガクさせながら、私の短気を訓戒するように言った。
この二段先生、年は私より五つくらい若いが、訓戒癖があるのである。私など年がいっているので余り叱られない方だが、若い学生君など規則違反でもしようものなら、ミソクソのようにやっつけられた。違反の中でも二段先生は「待った」が最もきらいだった。そのかわり、上達の見込みの乏しい私などにはなかなか相手になってくれないけれど、学生君には自ら率先するようにして稽古をつけてやった。どうせ叱るなら、叱り甲斐のあるものの方が人情というものであろう。
「ではおやじ、久しぶりだから一局、ご指導を頂こうか」
と私は内心びくびくしながら挑戦すると、
「いやあ、今日は朝から打ちつづけで、ちょっと、くたびれているんでね」
と二段先生が身をかわした。十回のうち九回までこれなので、私もなるべく挑戦はさけているのであるが、今日は久しぶりだから打ってくれるかと思ったが、やっぱりダメだった。
「いまに、あんたの好敵手があらわれるよ。もうじき来る時分だから、暫くこのストーブにでもあたっていてくれ」
と二段先生が言った。
「好敵手って、あの何とかいう、大学生君のことか」
「いいや、学生ではない。女だ」
「女？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c